

## 資料

### 3. 仙台大学漕艇部学生生活不満度調査報告

#### —仙台大学運動部強化支援システム事業の一環として—

宮城 進, 田口 善雄, 鈴木 省三,  
勝田 隆, 中房 敏朗, 長橋 雅人,  
菊地 直子, 阿部 肇, 朴澤 泰治

A Report of Results of Questionnaire about Student Life of Rowboat Club Students

MIYAGI Susumu, TAGUCHI Yoshio, SUZUKI Shozo, KATSUTA Takashi, NAKAFUSA Toshiro,  
NAGAHASHI Masahito, KIKUCHI Naoko, ABE Tadashi and HOZAWA Taiji

---

#### I、はじめに

近年の大学運動部の指導体制は、個々の指導者側の強い思惑・方向性の中で管理され、特に選手に対しては競技力向上に主眼が置かれ、本来の学生の本分である学業そしてスポーツという「文武両道」の精神が欠落しつつあるように思われる。

そこで仙台大学は、従来の学生の立場を尊厳し、人格の形成、健全な精神など学生の内面的な質の向上をねらいとして、「仙台大学運動部強化支援システム事業」を立ち上げた。その事業は、単なる競技力強化だけでなく、学業・生活管理やそれらに伴う施設の増設等について、大学全体の問題として取り組んでいる。

今回対象とした漕艇部（以下、ボート部・員と称す）は、その上記事業のモデルケースとして取り上げたものである。創設を含め本学の意思が反映され、また、真の学生教育を目指すための支援システムの確立が成されるかどうか、その使命を担う指標として注目されるところである。

その方向性としては、①優秀な指導者と高い志を持ったボート部員間に生まれる真の信頼感・コミュニケーションの充足、②その中で指導がなされ、そこから育まれた健全な精神の醸成、③学業はもとより学内行事にも積極的に参加するなど充実したキャンパスライフの充実、④仙台大学全学生の手本となれるような存在感や責任感の自覚というものが挙げられる。その上で、その成果としてボート競技においても、常に日本の頂点に君臨し、世界を目指して、日本スポーツ界に貢献する人材として育成していきたいというものである。

そこで本研究は、その支援システムの一環である「学生生活領域」に着目し、ボート部員たちの生活管理運営の充実を図るべく、現段階までの施設設備や生活システムの点検を含め充足度を計る目的で、不満度調査を実施した。

今回、あえて満足度調査ではなく「不満を問う」ということをねらいとしたのは、部員たちの

「生の声」を尊重していることの現れであり、指導管理者と部員たちとの「見解の相違・ズレ」の解消を目指すものであり、このことから今回の本学の意志を反映しているものとする。

## II、方 法

資料の収集にあたっては、仙台大学ボート部員、男子22名（3年生4名・2年生7名・1年生11名）、女子7名（3年生1名・2年生2名・1年生4名）を対象に、アンケート調査を実施した。

具体的にはまず質問内容については前述の主旨を踏まえ、不満度調査の不満事項をA群として、以下①大学・寮所在地の印象、②授業と練習の関係、③寮生活（施設面・食事面・風紀面）、④コミュニケーション・人間関係の4領域に分別し、回答結果から不満点、不満度を導き出した。

また、部員たちの人物像の把握や、不満の実態の裏づけ資料とすることを目的に、補助調査として要望事項をB群として、以下①強化・指導方法、②トレーニング用器具・運営用備品等、③寮生活システム、④寮施設・設備・用具等、⑤練習場・周辺環境整備、⑥チームとしての意欲・マナー、⑦学生としての意欲・待遇の7領域について、自由回答による要望事項調査も実施した。

なお、不満度調査である全4領域については不満であるか否かを便宜上、意図的に不満であることを予測する形で質問し、それを選択する方式で回答させた。それに対し要望事項調査である全7領域についてはそれぞれの項目について自由回答方式を採用し、記述式で回答させた。

そして、アンケート調査により得られた回答を基本統計処理し、不満内容を抽出した。次に評価判定内容と照らし合わせ、チーム運営上の問題点として施設・設備面ではその充足を図るための対処策を、また、コミュニケーション面ではその指導法の改善等を促す方向性を導くこととした。

ただし、本研究調査はあくまでもスポーツライフ・マネジメント<sup>7)</sup>の領域内での作業であり、生活面を重んじ、メディカルチェックやヘルスチェックのような医・科学分野の調査や戦術的領域の調査は含まれていないものである。

### <評価判定内容>

1. チームとして チームワークの質、団結力の度合、部員上下・友人関係等の現状把握、知名度・評判、非難、その他
2. 環境設備として 練習場、艇庫、寮本体および周辺環境の整備度、立地条件の不具合、設備・備品・用具等の充足度、その他
3. 個人として 人格・人間性、意欲・向上心、勉学意欲、悩み、逃避、メディカル・フィジカルコンディション、健康度、金銭感覚、欲望、その他
4. 指導統率として 信頼度、尊敬度、部員との意思の疎通、指導の理解度・徹底度、チーム規則の厳守度、方針非難、その他
5. 管理充足として 安全管理度、サービス、人的補充・支援度、感謝、その他

なお、アンケート調査の質問内容については、結果資料として掲載するものとした。

## III 結果および考察

アンケート調査によって得られた回答結果を、回答が選択方式であるA群と、補助調査の記述方式であるB群の二つに分けた。前者については、質問内容と共に以下のように表にまとめた。特に

仙台大学漕艇部学生生活不満度調査報告

A群の不満事項については、不満の度合いを不満度とし、不満を示した者の人数を全体の人数で除した割合を百分率で示した。

後者については、自由記述式であるため、同意見の回答者の人数を集約し、多い順にその要望内容を列挙した。

なお、個人の姓名・出身地・競技歴等の履歴については、今回の主たる目的に直接関与するものでは無いと判断し、省略した。

<アンケート調査結果>

まず、A群の不満事項として①大学・寮所在地の印象、②授業と練習の関係、③寮生活（施設面・食事面・風紀面）、④コミュニケーション・人間関係の4領域についての回答結果を表1に示した。

表1、仙台大学ボート部男女別生活不満度

(単位：名・%)

A群、不満項目の質問内容		男子不満度 はいの人数/22名 (%)			女子不満度 はいの人数/7名 (%)			合計不満度 はいの人数/29名 (%)		
		はい	いいえ	割合	はい	いいえ	割合	はい	いいえ	割合
①大学・寮所在地の印象での不満										
イ	ここより東京の大学が良かった	0	22	0.0	0	7	0.0	0	29	0.0
ロ	ここでは競技力向上は無理だ	0	22	0.0	0	7	0.0	0	29	0.0
ハ	ここは田舎っぽくて、寂し過ぎる	7	15	31.8	1	6	14.3	8	21	34.5
ニ	遊ぶ所が無くて、つまらない	16	6	72.7	4	3	57.1	20	9	69.0
ホ	ボート部をやめたいと思った	1	21	4.5	3	4	42.6	4	25	13.8
②授業と練習の関係についての不満										
イ	授業時間が多くて練習できない	1	21	4.5	0	7	0.0	1	28	3.4
ロ	練習時間が長くて勉強できない	1	21	4.5	1	6	14.3	2	27	6.9
ハ	授業と練習で遊ぶ時間がない	8	14	36.4	5	2	71.4	13	16	44.8
ニ	練習が長く他学生と付合えない	6	16	27.2	1	6	14.3	7	22	24.1
ホ	寮から大学まで遠くておっくう	1	21	4.5	0	7	0.0	1	28	3.4
ヘ	練習がつかく授業をサボった	5	17	22.7	2	5	28.6	7	22	24.1
③寮生活についての不満										
施設面	イ 寮の部屋が狭すぎる	7	15	31.8	3	4	42.6	10	19	34.5
	ロ 一人一部屋の方が良い	4	18	18.2	3	4	42.6	7	22	24.1
	ハ 男女同じ建物でない方が良い	18	4	81.8	2	5	28.6	20	9	69.0
食事面	イ 食事当番が辛い	6	16	27.2	4	3	57.1	10	19	34.5
	ロ 調理師を雇うべきだ	7	15	31.8	1	6	14.3	8	21	34.5
	ハ 食事の量が足りない	10	12	45.5	0	7	0.0	10	19	34.5
	ニ 食事がまずい	1	21	4.5	0	7	0.0	1	28	3.4
風紀面	イ 寮の規則がきびしすぎる	1	21	4.5	1	6	14.3	2	27	6.9
	ロ 寮の規則を破ったことある	7	15	31.8	2	5	28.6	9	20	31.0
	ハ 寮でお金を盗まれたことある	0	22	0.0	0	7	0.0	0	29	0.0
	ニ 寮で物を盗まれたことがある	2	20	9.0	0	7	0.0	9	20	31.0
	ホ 寮内で「イジメ」がある	0	22	0.0	0	7	0.0	0	29	0.0
	ヘ 病気の時、看病してくれない	2	20	9.0	1	6	14.3	3	26	10.3
	ト 寮内の雰囲気息苦しい	1	21	4.5	1	6	14.3	2	27	6.9

④コミュニケーション人間関係の不满		はい	いいえ	割合	はい	いいえ	割合	はい	いいえ	割合
イ	指導者がきびしすぎる	0	22	0.0	1	6	14.3	0	29	0.0
ロ	指導者がまじめで本音を言えない	0	22	0.0	2	5	28.6	0	29	0.0
ハ	指導者が偉大すぎて相談できない	1	21	4.5	0	7	0.0	1	28	3.4
ニ	先輩がきびしすぎる (1年生のみ)	2	9	18.2	2	2	50.0	4	11	26.7
ホ	先輩に殴られたことがある (1年生)	4	7	36.4	0	4	0.0	4	11	26.7
ヘ	尊敬できる先輩がいない (1年生のみ)	1	10	9.1	2	2	50.0	3	12	20.3
ト	悩みを相談できる先輩がいない (1年)	6	5	54.5	1	3	25.0	7	8	46.7
チ	心から話せる友達ができない	2	20	9.0	0	7	0.0	2	27	6.9
リ	付き合いづらい人がある	14	8	63.6	3	4	42.6	17	12	58.6
ヌ	やめてもらいたい人がある	3	19	13.6	0	7	0.0	3	26	10.3
ル	生意気な後輩がいる (2,3年生のみ)	2	9	18.2	1	2	25.0	3	11	21.4

次に補助調査であるB群の要望事項について、その回答結果としての要望内容を①強化・指導方法、①トレーニング用器具・運営用備品等、③寮生活システム、④寮施設・設備・用具等、⑤練習場・周辺環境整備、⑥チームとしての意欲・マナー、⑦学生としての意欲・待遇の7領域別に、同意者数の多い順に以下に示した。

<予備調査結果>

B群、要望事項 (回答内容)

(同意者数 単位;名)

①強化、指導方法について

- ・資金、スポンサーの協力、応援がほしい
- ・遠征合宿をしたい
- ・科学サポート・トレーニング理論を研修したい
- ・メディカルチェック・マッサージサービスをしてほしい
- ・ライバルチームが必要
- ・シングル練習を導入してほしい
- ・コックスを増員してほしい

男子	+	女子	=	合計数	順位(位)
6	+	2	=	8	1
2	+	1	=	3	2
1	+	2	=	3	2
3	+	0	=	3	2
3	+	0	=	3	2
1	+	0	=	1	6
1	+	0	=	1	6

②トレーニング用器具・運営用備品について

- ・艇(ボート)を増やしてほしい
- ・ウエイトトレーニング用具を購入してほしい
- ・公用車、バスが必要
- ・テレビ、ビデオデッキがほしい

7	+	0	=	7	1
4	+	2	=	6	2
5	+	0	=	5	3
1	+	2	=	3	4

③寮生活システムについて

- ・男女別々の寮を設置してほしい
- ・管理人・調理師を雇ってほしい
- ・中国人留学生も禁煙にしてほしい
- ・食事の量を増やしてほしい

4	+	1	=	5	1
5	+	0	=	5	1
2	+	0	=	2	3
1	+	0	=	1	4

④寮施設、設備、用具等について

- ・洗濯機を増やしてほしい
- ・風呂場を暖かくしてほしい
- ・リラックスルーム設置してほしい

3	+	0	=	3	1
3	+	0	=	3	1
1	+	1	=	2	3

仙台大学漕艇部学生生活不満度調査報告

・トイレを増設してほしい	1	+	0	=	1	4
・製氷機がほしい	1	+	0	=	1	4
・物干し場を設置してほしい	1	+	0	=	1	4
・物置場・クローゼットがほしい	1	+	0	=	1	4
・一人部屋にしてほしい	0	+	1	=	1	4
⑤練習場、周辺環境整備について						
・棧橋、台船を設置してほしい	10	+	1	=	11	1
・川の水深を深くしてほしい	6	+	1	=	7	2
・土手堤の手入れ（清掃・草刈）してほしい	4	+	0	=	4	3
・通学路に街灯を設置してほしい	1	+	2	=	3	4
・艇庫（戸田舎）がほしい	1	+	1	=	2	5
⑥チームの意欲・マナーについて						
・積極性のある行動を取ってほしい（後輩へ）	4	+	3	=	7	1
・部員間の信頼感がほしい（全員へ）	2	+	4	=	6	2
・チーム一丸となる団結力がほしい（全員へ）	2	+	2	=	4	3
・お互いのきびしさがほしい（全員へ）	3	+	0	=	3	4
・話し合いの場を持ってほしい（先輩へ）	1	+	2	=	3	4
・大学全体に親しまれるようになろう（全員へ）	1	+	0	=	1	6
・尊敬の念を持ってほしい（後輩へ）	1	+	0	=	1	6
・規律正しい生活を送ってほしい（後輩へ）	0	+	1	=	1	6
・与えられたものを大切にしよう（後輩へ）	0	+	1	=	1	6
⑦学生としての意欲・待遇について						
・休日・自由時間がほしい	4	+	3	=	7	1
・学業にも積極的に（後輩へ）	2	+	0	=	2	2
・大学、勉強の情報がほしい	1	+	0	=	1	3
・元気に生活してほしい（後輩へ）	1	+	0	=	1	3
・勉強できる機会、環境がほしい	1	+	0	=	1	3
・下級生の意見も取り入れてほしい（先輩へ）	1	+	0	=	1	3
・自立してほしい（後輩へ）	0	+	1	=	1	3

まず、評価に当たっては、基本的作業として抽出された不満内容およびその割合等の回答結果と、前述に示した評価判定内容を照らし合わせ、チーム運営上の欠落部分・不十分な点を抽出し、その対処策を導いていくというものである。また、その実態証明の裏づけとして補助調査の結果を参考とし、考察を進めていく。

そして、この期待感や不安感は一領域にそれぞれ異なったねらいを込めて存在している。そこでそのねらい（本意）について全領域のそれぞれをまとめたものを以下に示した。

- ①大学・寮所在地の印象についての質問には、本学の所在する宮城県柴田町が地方であることから負う地域的ハンディキャップを部員たちはどう思っているかを引き出すねらいが含まれている。
- ②授業と練習の関係についての質問には、部員たちは学業をどうとらえ、また、練習が授業にどう影響を及ぼすのか、それらの不安感を引き出すねらいが含まれている。
- ③寮生活についての質問には以下の不安感を引き出すねらいが含まれている。

(施設面)には、現在の寮で快適に暮らしていけるのか

(食事面)には、栄養を含め、食事関係に何ら問題点は無いか

(風紀面)には、寮則の従事の影に、違反行為は無いか、仲良く暮らしているか

- ④コミュニケーション・人間関係についての質問には、指導者と部員との関係、部員同士の関係がどうなっているのか、指導者に対する尊敬の念、信頼度は十分あるのか、部員同士の意思の疎通はあるのか等、それらの不安感を引き出すねらいが含まれている。

次に、補助調査の結果については、質問の方式が自由回答方式でもあり、領域的には指定はあるが、内容についてはまったく誘導性が無く、部員たちの率直な要望、意見であり、今回の調査の主たる目的である予測される期待感や不安感・疑問点を求めるという方向性が拡大してしまうというおそれが予想できることから、今回は本調査の回答内容を裏付けるための参考資料とした。

また、回答結果の読み方、判断の仕方については、一概に人数の多さやその率の高さだけで評価を決定するのは危険であると思われる。なぜなら、質問の中にはチーム運営上危険度の高い内容もあり、少数回答であっても、それを見逃すとチーム崩壊を招くことになりかねないことも予想されるからである。

したがって、今回の評価においては、基本的には回答率や度合の高い結果を主たる対象内容として注目するが、加えて、少数意見であっても危機感を感じ取れる回答結果・内容については、慎重に評価をしていくことにする。

以上のことから、本調査での評価に臨む姿勢は、基本的判断方法は踏まえるが、あまりデータの数値にとらわれず、指導管理者側の思惑、ねらい(本意)を尊重し、且つ危機感を感じる内容については慎重に扱うものとする。

次にこれらすべてを踏まえ、A群4領域について評価としての考察を進める。

まず、①の大学、寮の所在地の印象についての質問であるが、その指導側のねらいは本学の所在する宮城県柴田町が地方であることから負う地域的ハンデキャップを部員たちはどう思っているかであるが、「大学所在地」と「競技力向上に適した場所か」についての回答結果では不満に同調した部員は一人もいなかった。しかし、感傷的な面では「寂しい」「遊ぶところが無い」の回答結果において34.5%、69%の高い不満度を示し、さらに、退部を考えた者が全体で4名、そのうちの女子が3名いた。このことから、部員たちは仙台大学の現状を肯定的に捉えて進学、入部したと推測できるが、実際入学して予想と異なる生活環境を不満に感じている部員も多々存在するということが判明した。さらに、現在は不明であるが、一度は退部を考えた者が少人数とはいえ、存在したという事実は認識されるべきであろう。

また、「寂しい」などの感傷的な面での不満結果が多かったが、これは大学所在地がそのような環境条件の地域にあることは事実であり、必然的に生まれる印象だと思われ、安易ではあるがそれほど心配は無く、退部をほのめかした者以外は皆、高い志を持った意欲に満ちた者たちであると思われる。今後の対処策としては感傷的な面については部員たちにそれ以上のボート部の魅力を感じさせた上で、再確認すること、また、退部問題に関してはあらためて指導者が個人個人を再確認し、本意であるのか、または解消したのか確認し、また、ほのめかす者がいた場合には話し合っ解決していく他、無いと考える。

②の授業と練習の関係についての質問では部員たちは学業をどうとらえ、また、練習が授業にどう影響を及ぼすのかがねらいであったが、そのうちの「遊ぶ時間が無い」という回答が全体の5割近くを占めた。また、「練習時間が長くて勉強できない」「他学生と付き合えない」の回答結果が合

計9名と少数ではあるが示された。これらの回答に共通する不満の要因は練習時間の量・長さにあると判断できる。このことは指導側にすれば非常に不安感を感じざるを得ない。それは、指導者側が提示した練習時間、量に対する反発的不満として判断するからである。これは評価判定内容からすると、指導方針非難にあたり、この不満を見逃してしまうと今後のチーム運営上、指導者と部員たちの信頼性の欠如までに影響を及ぼしてしまうと考える。そこで、その解決策としてはまず練習時間が本当に長すぎるのか、妥当なのかを確認し、最終的には部員たちにも事前にその練習内容の必要性とそれに伴う妥当な時間・量を示し、理解・納得させた上で練習に取り組むことが必要ではないかと考える。ちなみに現在のボート部の大学授業開校平常時の練習時間は朝練習が1時間30分、午後練習が2時間の計3時間30分であり、他の運動部とあまり変わり無く、むしろ少ないくらいだと判断する。ただし、勉強時間に差し支えるということが事実だとすると、重要な問題となる。より詳しい調査が求められるが、ボート部の1日のタイムスケジュールにおいては、基本的に午前8時から午後4時までの間、および夜間は夕食後7時から10時30分までは大学授業、昼食を含め、プライベートタイムとなっている。したがって、勉強したい者はこのプライベートタイムを調整すれば十分その時間は取れるはずである。つまりこの問題は、指導管理側の問題ではなく、回答者本人の時間の使い方の問題だと考えられる。

他として、寮から大学までの通学距離が3km有り、所要時間は自転車で約20分かかり、通学路としては他の一般学生よりは遠距離となっている。そのため苦痛感や不快感が生じ、必然的に授業をサボる可能性が生まれるのではないかという、管理側の不安感、憶測が成り立つ。それについて、回数は不明であるが「実際授業をサボった」と回答した部員は7名であった。理想を求める本大学構想からすれば、この結果は非常に残念であり、管理面において厳粛に受け止める必要があると思われる。もちろんこの行為は部員たち1人1人のモラルの問題ではあるが、高い志を目指す仙台大学においては部員たちに、より以上の学業の大事さ、取り組み方への高い意識を持たせるよう指導していくことが求められる。

次に、③の寮生活への不満事項についてであるが、管理側の思惑としてはより部員たちに「快適さを提供してやりたい」という思いやりが優先されると思うが、そのためには宿舎としての施設・設備・用具の充実、食事を含めた待遇面の満足度、そして共同生活・集団生活を快適に送るための部員たちの秩序、チームワークの統制度等において、どれだけ達成されているかということが問われる。それについて、まず施設面の質問内容として、「建物が男女別でない」という回答結果が本アンケート調査結果において全体の領域の中で不満度1位であり、全体で20名、69%を占めていた。また、このことに関しては予備調査の要望意見の中にも5名の者が「男女別の寮がほしい」と回答しており、かなり多くの不満者がいることを物語っている。

現在のボート部の寮は、ボート部独自として大学管理下のもと、提供された3階建ての鉄筋コンクリート製の建物1棟である。そして、そのうちの3階を女子専用階、1・2階を男子が使用する形で男女が共有している。また、すぐ隣にはもう1棟、外国人留学生や迎賓宿舎として、および一般学生向けの宿舎として同レベルの建物が存在している。

基本的には男女間のプライバシーは保たれているはずであるが、食堂やホールは共用である。異性間の問題に対して管理側は、特に気を使い配慮しているつもりであるが、思春期の学生たちにとっては意識せざるを得ず、特に男子に関しては不満度全領域中最高の82%を占めていることから、相当強い不安感を感じていることが明らかとなった。

この問題はハード面の問題であり、経費調達が最優先されるため、直ちに改善できるものではな

い。ただし、管理側は重く受け止め、早期改善を講じるべきであろう。そのためにはまず、大学経営者側に理解を求め、経費調達を含めた施策を早急に作成する必要があると考える。その他として部屋の狭さに対する不満回答、関連して「一人部屋の方が良い」に同調した回答が、それぞれ全体で10名と7名で、多数の要望が見られる。特に女子の要望はどちらも7名中3名で、率としては高い値である。これもハード面であり、寮の収容能力や運営条件との兼ね合いで改善できるかが決まる訳であり、現段階では判断し兼ねる。

また、不満度調査内容には上げなかったが、寮の付帯設備・用具のことについて予備調査では多くの要望が示されていた。特に多かった要望事項は洗濯機の増設や風呂の整備であった。また少数意見であるが、興味深かったのは物干し場の設置、寮の周辺のことであるが、大学までの通学路に街灯を設置してほしい等が挙げられる。ここに挙げた要望内容は即生活に結びつく、生産性のある要望事項であり、また、小規模なハード面であり、その実現に際しては、惜しまず積極的に予算の許す範囲で調達、改善していけると思われる。ただし、街灯設置に関しては、公共物であることから、私的設置よりも最寄の行政機関に申請すべきであろう。

さらに、寮内のことではないが、やはり予備調査により極めて要望の高かったものに、練習場としての川の中に栈橋、または船台を設置してほしい旨の意見が10名以上あった。競技力向上や安全性のためには是非とも必要な施設であることは言うまでも無いが、行政的条件なのか設置するためには役所の許可が必要のようである。その設置実現のためには、行政サイドに熱意を示し、申請にあたるのが不可欠である。それ以外の努力としてまず地域住民の人々にボート競技を知らしめ、ファンになってもらう。共に住民を味方にして、その上で住民を動かして目的を達成する戦略をとるべきであろう。

次に食事面においては、食事自体よりもそれを賄う食事当番についての不満が下級生に多く見られた。特に「調理師を雇ってほしい」という意見が多かったが、予備調査の要望の中にも同様の意見を回答した者が5名いた。現在の寮の食事の賄い方法は、ボート部独自で行い、朝食・夕食を部員たち、特に1年生が食事当番として交代しながら、作業に当たり、部員全員分を調理し提供するというシステムをとっている。献立の内容に関しては、本学の栄養サポートスタッフである運動栄養学科の学生たちが実習をかねて献立指導をしてくれているので、問題は無いと思われる。問題は普段ボート部員として練習に励み、交代制とはいえ食事を調理し、配膳、後片付けまでするのは並大抵の労力ではないということである。この行為が「修行」として教育の一環であるならば、それも許されることであろう。そうだとすれば、その趣旨を事前に明確に当事者たちに説明しておくことが大事である。もし、人件費削減のためであれば、これは他の領域で節減する努力をし、調理師を用意することが管理者側の勤めではないかと考える。その他として「食事の量が足りない」に同調した者が10名（男子）いた。栄養バランスや体重コントロールということで制限されるということはあるが、寮の食事で満足できない者は結局外食や捕食で補う訳であり、無駄使いの元となり、逆に風紀を乱すことに繋がる危険性もある。このことから、栄養サポートスタッフたちと増量について検討してもらい、改善することを勧める。

次に寮内の風紀面であるが、「寮則を破ったことがある」「物を盗まれたことがある」との回答がそれぞれ31%あった。このことは、指導管理者にとっては大きな汚点であり、問題である。評価判定内容からすればチーム運営上最も危機感を感じさせられるところであり、チームとしての裏切り行為＝規則厳守の低下、部員間同士の不信感増徴、人間性の欠落等、ダメージは大きい。盗難に関しては外部犯説、内部犯説の両方が考えられるが、外部犯説であれば、部屋の管理能力の無さ、無



用心さが露出され、内部犯説であれば、仲間としてのモラル崩壊へと繋がるものであり、重大な問題である。今後、この件に関し、深く追求するか否かは指導管理者の判断にゆだねられることと思われるが、部員たちの生活上モラル等の気持ちの引き締めが必要ではないだろうか。

なお、幸い金銭の盗難は無く、また、イジメについても無いようなので安堵するところであるが、このままでは上記の件も発生する可能性は大であり、改めて指導管理者の指導が望まれる。

最後に、④のチーム内のコミュニケーション、人間関係に対する質問においては、指導側のねらいとして、指導者と部員との関係、部員同士の関係がどうなっているのか、指導者に対する尊敬の念、信頼度は十分あるのか、部員同士の意思の疎通はあるのか等が上げられる。

まず、はじめの3問イ、ロ、ハの質問内容は指導者と部員との関係に関するものであり、その回答結果からは指導者に対する部員たちの尊敬の念の有無、信頼度が見えてくる。その結果、いずれの回答も不満を示した者が無く、このことからボート部の指導者は部員たちにとって、きびしすぎず、本音で相談できる人間性にあふれた信頼できる人物であることが伺えた。本学の指導者は競技歴、指導歴共に日本のトップクラスの経歴を有し、特に2003年の23才以下世界選手権では全日本Jr代表チームの監督を務めており、この実績からも本人が指導者として優れ、部員たちからも上述のように慕われているのであろう。

次に二からトまでの質問は部員同士の関係のうち、特に先輩に対する下級生の尊敬の念、1年生の見方が示されるものであるが、「二、先輩がきびしすぎる」に回答した1年生が男女2名ずつ、「ホ、先輩に殴られたことがある」が男子4名という結果であり、人数的には少ないが、理想的チーム構想からして暴力というあるまじき行為が示されたことで、チーム運営上好ましくない実態が露見した。また、「へ、尊敬できる先輩がいない」「ト、悩みを相談できる先輩がいない」の回答に同意した1年生が2問、合わせて全体で延べ10名おり、前者の問題と重ね合わせると先輩に対する後輩たちの信頼感の欠如のようなものが見えてくる。これは、おそらくチーム内の1部の者たちだけの出来事だと推察できるが事実であることは確かである。また、これは1年生の立場からの見解であり、仮に先輩側から見れば、下級生が上級生の指示に対し、あまりに従わず、思い余って殴る行為にはしってしまったとも考えられる。いずれにせよ、まず、暴力は否定しなければならず、あまり良くない事態が存在することは確かであり、部員同士の関係については、評価判定として見ても、1部の者たちだけの出来事であることを考慮してもチームワークに若干の乱れがあり、特に上下関係においては互いのコミュニケーションが取れているとはいえない状態が生じていると判断する。このことについて後の質問で「ル、生意気な後輩がいる」という質問に対して同意者が上級生3名いた。このことから、上下関係の不具合が存在していることがわかる。

また、予備調査におけるチームのマナーについての要望回答の傾向を見ても先輩から後輩へ道徳的な要望のメッセージが多く、逆に後輩たちから先輩へ1件だけだが反発的なメッセージが示されていた。ここにも部員間の上下関係の不具合があることが証明されている。

これらのことから、この好ましくない事例をチーム関係者全員が謙虚に受け止め、特に指導管理者たちは反省し、その原因究明と対策に取り組まなければならない。

また、このことは創部よりの驚異的な活躍と3年目という一番歪みが起きやすい時期が重なり、そこから生まれた「油断」が引き起こした事例であるとも考えられよう。しかし、何はともあれ、すべて人為的な現象の結果として部員一同この事実を謙虚にとらえ、深く反省を促す必要があると考える。

以上、ボート部を対象に不満度調査した結果、以下のような問題点とその対処策が導き出された。

①大学・寮所在地の印象の領域では、ボート部員たちは基本的には高い志を持った意欲に満ちた者たちであると評価できる。しかし、退部を促す者も現れ、今後の対処策としては部員たちに今以上のボート部の魅力を感じさせた上で、再確認させること。また、特に退部問題に関してはあらためて指導者が個人個人を再確認し、本意であるのか、または解消したのか確認し、処理すること。

②授業と練習の関係の領域では、まず練習時間等、内容について、その妥当性をあらかじめ理解させた上で練習に取り組むことが必要ではないかと考える。また、授業のサボリについての結果は非常に残念であり、管理面において極めて厳粛に受け止める必要がある。もちろんこの行為は部員たち1人1人のモラルの問題ではあるが、高い志を目指す仙台大学においては、部員たちに学業の大事さ、取り組み方への高い意識を持たせるよう指導していくことが求められる。

③寮生活（施設面・食事面・風紀面）の領域では、男女別の寮設置案の必要性が認められたが、この問題はハード面の問題であり、経費調達が最優先されるものであり、直ちに改善できるものではないが、管理側は事実として受け止め、早期改善に勤めてもらいたい。そのためにはまず、大学経営者側に理解を求め、経費調達を含めた施策を早急に作成する必要がある。

棧橋の設置は競技力向上に直接結びつく要望であり、その設置実現のためには行政サイドに熱意を示し、申請にあたること。それ以外の努力として、住民の人々にボート競技を知らしめ、ファンになってもらい、住民を味方にし、その上で住民を動かして目的を達成する戦略をとるべきであろう。

調理師の雇用に関しては、食事当番システムが「修行」として教育の一環であるならば、それも許されることであろう。そうであればその趣旨を事前に明確に当事者たちに説明しておくことが大事である。もし、人件費削減のためであれば、他の領域で節減する努力をし、調理師を用意することが管理者側の勤めではないかと考える。

盗難問題に対しては、被害者の発想ではなく、部員たちの生活モラルの低下が原因だと考えられ、気持ちの引き締めが必要である。

④コミュニケーション・人間関係の領域では本学の指導者に関しては指導力に優れ、部員たちからも強く慕われていることが伺える。

部員間におけるコミュニケーションについてはチームワークに若干の乱れがあり、特に上下関係においては互いのコミュニケーションが取れているとはいえない状態が生じていると判断する。したがって、指導管理者たちはその原因究明と対策に取り組み、部員一同はこの事実を謙虚にとらえ、深く反省を促す必要があると考える。

⑤今回、ボート部の競技力向上のための施策の一環として、生活上の不満点を露出させ、部員たちの現在のモチベーションレベルを判定し、チーム運営上の問題点を導き出し、改善策への検討を加えた。その結果、ほとんどの部員は高い志を持った意欲に満ちた者たちであるが、退部をほのめかす者もあり、チームモチベーションの低下が伺われる。また、施設、待遇面の充足度においても、不満点は多々あり、選手としてのパフォーマンス精度の低下へ繋がる危険性を感じる。そして、特に今回露見された重要視すべき問題点は、部員間にコミュニケーションがあまり取れておらず、特に上下関係において互いに不信感が生じていることが上げられる。具体的改善策はここでは提供できないが、指導者、管理者はこのことを厳粛に受け止め、早急に部員間のコミュニケーション充実のための措置を図るべきである。

#### IV、要約および結論

本研究は、仙台大学支援システムの一環である学生生活領域に着目し、ボート部員たちの生活の管理運営の充実に図るべく、現段階までの施設の配備や生活システム施策の点検を含め充足度を計る目的で、不満度調査を実施した。具体的にはボート部を対象に不満度調査として①大学・寮所在地の印象、②授業と練習の関係、③寮生活（施設面・食事面・風紀面）、④コミュニケーション・人間関係の4領域について、アンケート調査を中心に調査を実施した。その結果、以下のような結論が得られた。

- 1). ボート部員たちは基本的に高い志を持った意欲に満ちた者たちであると評価できる。
- 2). 退部問題に関してはあらためて指導者が個人個人を再確認し、本意であるのか、または解消したのか確認し、処理すること。
- 3). 専門指導に当たっては、練習時間、内容等について、その妥当性をあらかじめ理解させた上で練習に取り組むことが必要である。
- 4). 授業のサボリについて管理者は極めて厳粛に受け止め、部員たちに本学が目指す学生象を再確認させ、学業の大事さ、取り組み方への高い意識を持たせるよう指導していくことが求められる。
- 5). 寮施設面では、男女別の寮設置案の必要性が認められ、管理側は事実として受け止め、早期改善に勤めるべきであろう。そのためにはまず、大学経営者側に理解を求め、経費調達を含めた施策を早急に作成する必要がある。
- 6). 栈橋の設置は競技力向上に直接結びつく要望であり、その設置実現のためには行政サイドに熱意を示し、住民を味方にして、その上で住民を動かして目的を達成する戦略をとるべきである。
- 7). 調理師の雇用に関しては、食事当番システムが部員たちのための「修行」としての教育の一環であるならば、その趣旨を事前に明確に当事者たちに説明しておくことが大事である。また、将来的には調理師を用意することが管理者側の勤めである。
- 8). 盗難問題に対しては、被害者的発想ではなく、部員たちの生活モラルの低下が原因だと考えられ、気持ちの引き締めが必要である。
- 9). 仙台大学ボート部の指導者は、指導力に優れ、部員たちからも強く慕われていることが伺える。
- 10). 部員間におけるコミュニケーションについてはチームワークに若干の乱れがあり、特に上下関係においては互いのコミュニケーションが取れているとはいえない状態が生じている。指導管理者はその原因究明と対策に取り組み、部員一同はこの事実を謙虚にとらえ、深く反省を促す必要がある。
- 11). 以上の通り、仙台大学ボート部において種々の問題点が抽出されたことから、仙台大学運動部強化構想およびボート部競技力向上達成のためには、より高度な指導、運営法の探求と実行が不可欠であり、当該者および本大学はより一層の努力と支援に勤めなければならないことが示唆された。

#### 参考文献

- 1) F F S A (フランス漕艇協会連盟) 編集、野津山 喜晴訳、フランスの漕艇理論 2003
- 2) 花岡美智子、勝つための食事と栄養、ナツメ社、2003、
- 3) 黒田善雄・他、スポーツ栄養の実際、文光堂、1996、13
- 4) 松田 保、一流選手を育てるとはどういうことか、二見書房、2003

宮城 進, 田口善雄, 鈴木省三, 勝田 隆, 中房敏朗, 長橋雅人, 菊地直子, 阿部 肇, 朴澤泰治

- 5) (財)スポーツ医・科学研究所編、松井秀治著、スポーツ選手の栄養と食事、ベースボールマガジン社、1995
- 6) 小沢哲史、ローイング・マニュアル、東北大学函南会東京支部、2003
- 7) 鈴木正成、実践的スポーツ栄養学、文光堂、2001
- 8) 鈴木正成、35歳からのスポーツ健康学、チクマ秀版社、1996
- 9) 鈴木正成、スポーツ栄養・食事学、同文書院、2002
- 10) 辻 秀一、心のカコーチング、講談社、20047
- 11) 横山厚志、ボート競技のトレーニング、月間 Rowing、2004

(平成17年1月20日受付,平成17年2月1日受理)